

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2015-145675

(P2015-145675A)

(43) 公開日 平成27年8月13日(2015.8.13)

(51) Int.Cl.
F03H 99/00 (2009.01)

F I
F03H 99/00 C

テーマコード (参考)

審査請求 未請求 請求項の数 1 書面 公開請求 (全 11 頁)

(21) 出願番号 特願2015-65193 (P2015-65193)
(22) 出願日 平成27年3月10日 (2015.3.10)

(71) 出願人 514287177
新谷 瑞穂
兵庫県明石市大久保町緑が丘23-5
(72) 発明者 新谷 瑞穂
兵庫県明石市大久保町緑が丘23-5

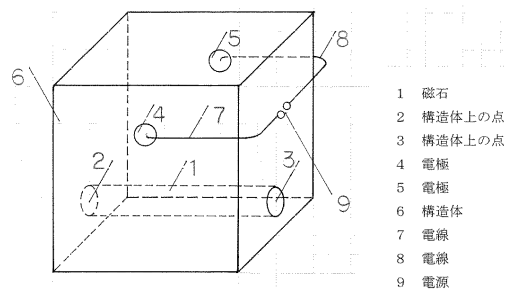
(54) 【発明の名称】 UFOの飛行原理に基づくUFO飛行装置

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】従来、宇宙空間に行くためにはロケットを使っていたが、身体にかかる加速度が大きく、一般人の宇宙旅行は困難であるという欠点があった。飛行機は、ある程度以上の速さで飛行していなければ墜落してしまうという原理的な欠陥があった。自動車は道路上を走行せざるを得ないので、道路容量を超える交通量が発生した時には渋滞が生じると言う欠点があった。本発明は、これらの欠点・欠陥を解決するための装置を提供する。

【解決手段】課題を解決するための手段は、発明者が見出したUFOの飛行原理に基づくものである。磁石と一対の電極とを固定した構造体について考える。磁石の磁界の中に於いて電極間で放電を起こすと、力の伝達に係る対称性が崩れ、構造体には零でない力が伝達される。この力により、構造体は加速度運動を行なう。これが、UFOの飛行原理であり、この構造体が、UFOの飛行原理に基づくUFO飛行装置を取り付けた飛行体となる。

【選択図】 図1



【特許請求の範囲】

【請求項 1】

磁石及び対をなす電極が取り付けられた物体であって、それらの電極間で放電が可能なもの。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

この発明は、フレミングの左手の法則から導かれるUFOの飛行原理に基づくUFO飛行装置に関するものである。

【背景技術】

【0002】

UFOの飛行原理は未発見であったので、従来UFO飛行装置は存在しなかった。

【先行技術文献】

【0003】

UFOについて、科学的若しくは技術的観点から論じられた先行文献はない。

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0004】

1 従来、宇宙空間に行くためにはロケットを使っていたが、身体にかかる加速度が大きく、一般人の宇宙旅行は困難であるという欠点があった。

2 飛行機は、ある程度以上の速さで飛行していなければ墜落してしまうという原理的な欠陥があった。

3 自動車は道路上を走行せざるを得ないので、道路容量を超える交通量が発生した時には渋滞が生じると言う欠点があった。

本発明は、これらの欠点・欠陥を解決する為になされたものである。

【課題を解決するための手段】

【0005】

課題を解決するための手段は、発明者が見出したUFOの飛行原理に基づくものである。

まず、その原理を紹介する為に、発明者が著した論文を全文引用する。

因みに、この論文は未発表である。

【0006】

(論文全文掲載)

10

20

30

UFO の飛行原理

10

20

新谷 瑞穂

30

平成 27 年 2 月 11 日

(以下本文)

40

U F O の 飛 行 原 理

1 . は じ め に

U F O と 言 う の は 、 未 確 認 飛 行 物 体 の 事 で あ る か ら 、 そ の 飛 行 原 理 を 論 じ る と 言 う 事 は 、 論 理 的 に は 如 何 な も の か と 言 う 観 は 否 め な い 。 寧 ろ 、 「 空 飛 ぶ 円 盤 等 の 新 し い 飛 行 物 体 に 係 る 飛 行 原 理 」 と で も 表 現 す べ き で あ る が 、 耳 目 に 入 り 易 い と 言 う 事 で 、 敢 て 、 標 記 の 通 り の 表 現 と し た 。

さ て 、 U F O に つ い て の 話 題 は 、 マ ス コ ミ に も 時 々 取 り 上 げ ら れ 、 U F O を 見 た と 言 う 人 の 情 報 も 掲 載 さ れ て い る 。

そ れ に よ る と 、 そ の 飛 行 の 様 子 は 、 急 発 進 ・ 急 停 止 ・ 急 角 度 タ ー ン 等 々 だ そ う で あ る 。 し か し 、 肝 心 の 飛 行 原 理 に つ い て は 詳 し く 紹 介 さ れ た と 言 う 事 は 寡 聞 に し て 知 ら な い 。

50

未確認飛行物体であるから、それは当然の事と言えば当然の事である。

かねてより人類が想像してきた空飛ぶ円盤と言う未来の新しい乗り物を作り出すためには、この原理を解明する必要がある。

又、それは、人類の一つの夢でもあると思う。

幸運にも、筆者はこの原理を見出した。それを、以下に示す。

2. 相異なる二つの条件下に於けるフレミングの左手の法則の適用

フレミングの左手の法則によると、「磁界 \vec{B} の中に置かれた導線に電流 \vec{I} を流すと、導線

には単位長さ当り $\vec{f} = \vec{I} \times \vec{B}$ の力が作用する。」

10

導線の長さを l とすると、導線全体には $\vec{F} = l\vec{f}$ なる力が作用する。また、磁界 \vec{B} を生

ぜしめている磁石には反作用たる反対向きの力 $-\vec{F}$ が作用する。

磁石 J (磁石の形状は問わない。) と導

線 L とを $\vec{I} \times \vec{B} = \vec{0}$

とならないような位置関係で、図 1 のように構造体

20

A B C D E F G H の (構造体の役割は、磁石と導線との相対的な位置関係を固定する事であるから、形状は問わない。また、構造体は磁石や導線等に対して電磁気的な影響を与える事がないように配慮されているものとする。) 点 P, Q, U, V の位置で固定するものとする。ここでは、磁石を棒状の磁石であると仮定している。また、点 U 及び点 V は、U V 間に電流を流す事が出来るように、電源に繋がっているものとする。

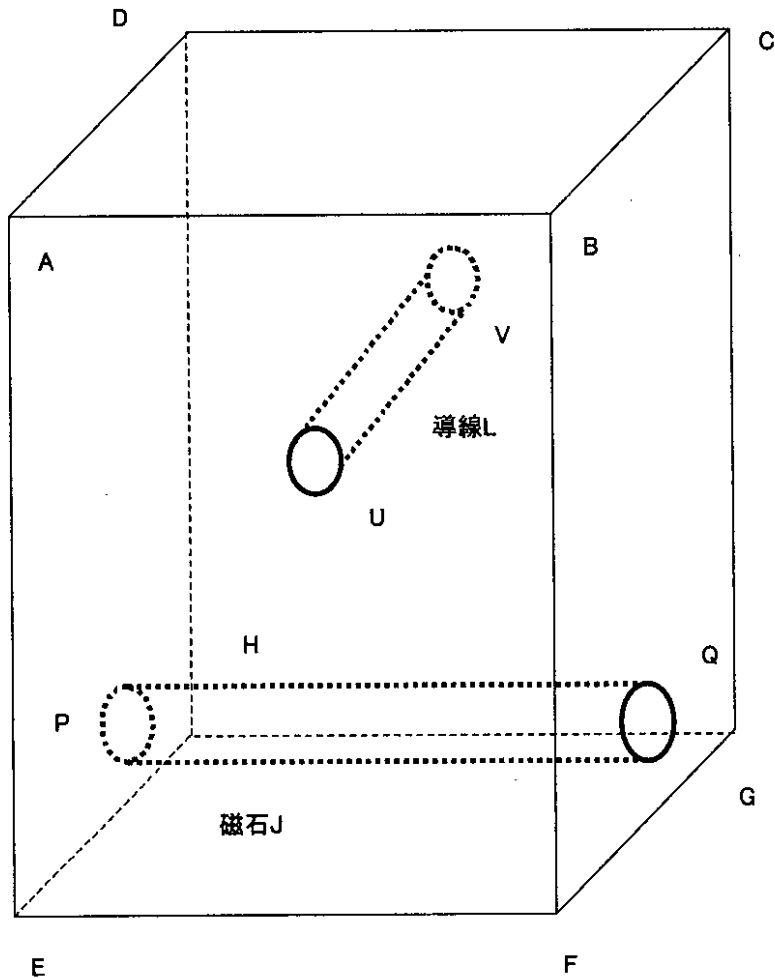


図1 磁石と導線の位置関係

2 - 1 . 導線に電流を流した場合

棒状の磁石 J の N 極・S 極がそれぞれ点 P ・点 Q に位置している場合、U から V に向けて電流 \vec{I} を流すと、導線 L には下向きの力（導線を磁石に近付かせる向きの力 \vec{F} ）が作用

し、磁石 J には上向きの力（磁石を導線に近付かせる向きの力 $-\vec{F}$ ）が作用する。

磁石及び導線は、構造体 A B C D E F G H に固定されているので、磁石及び導線に作用する力は、それぞれを固定している点 P , Q 及び点 U , V を介して構造体に伝達される。

\vec{F} 及び $-\vec{F}$ は磁界の相互作用により同一の作用線上に生じるから偶力ではない。

構造体に働く力の総和、即ち合力は $\vec{F} - \vec{F} = \vec{0}$ であるから、導線に電流を流しても構造体

は加速度運動をしない。

2 - 2 . 導線 L を設置せずに、電極 U , V 間で放電を起こした場合

図 2 に於いて、電気を電極 U から電極 V に向けて放電させた場合、電子は V から U に向けて空中を飛ぶ。電子は、磁石 J の影響を受けて磁石に近づく向きに曲げられて飛ぶから、首尾よく放電を起こさせるために、電極 U 及び電極 V は電子の軌道の曲がり方を考慮して、位置や大きさを決める必要がある。

10

20

30

40

50

電子の流れが磁石から受ける力は、フレミングの左手の法則に従って \vec{F} であり、この電子の流れが作る磁界が磁石 J に及ぼす力は $-\vec{F}$ である。

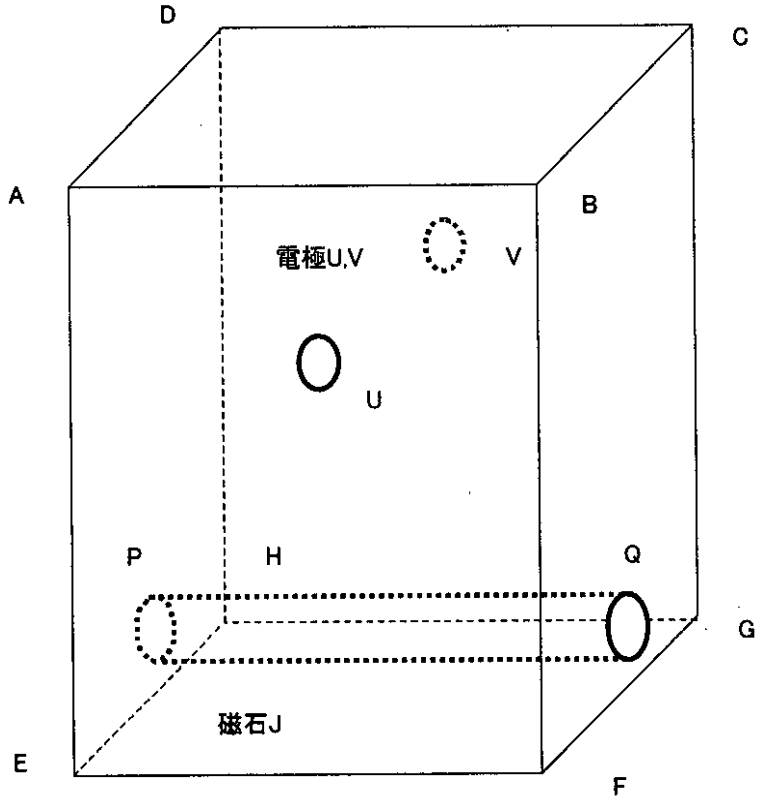


図2 磁石と電極の位置関係

磁石 J は点 P , Q で固定されているので、

磁石が受ける力 $-\vec{F}$ は、

点 P , Q を介して構造体 A B C D E F G H に伝達される。

一方、放電を起こす V U 間を移動する

電子は全体として力 \vec{F} を受けるが、電子自体はこの力を構造体 ABCD-EFGH に伝達する事は出来ない。

何故なら、U V 間を繋ぐ物体（導線）は存在せず、電子は空中を飛んでいるからである。

従って、点 V と点 U の間で放電を起こした場合には、構造体 ABCD-EFGH には力 $-\vec{F}$ のみが伝達される。

それ故、図 2 に示すように、構造体 A B C D E F G H に磁石 J 及び電極 U , V を固定し、電

極 V,U 間で放電を起こさせれば、構造体は $-\vec{F} = -I\vec{l} \times \vec{B} \neq \vec{0}$ なる力を受ける。

3 . U F O の飛行原理と U F O 飛行装置

$\vec{l} \times \vec{B} = \vec{0}$ とならないような位置関係で、磁石と一對の電極とを構造体にそれぞれ固定し、

10

20

30

40

50

電極間で放電を起こすものとする。(磁石が棒状の磁石であるならば、例えば図2に示すようになる。)

放電により空間を飛ぶ電子は、磁石が作る磁界から力を受け、曲線運動を行なう。しかし、電子が受けている力は、電子が空間を飛んでいるが故に構造体には伝達されない。

然るに、磁石も運動する電子が作る磁界から力を受けるが、この力は、磁石を固定している点を介して構造体に伝達される。

電極間が導線で繋がれておれば、磁石が受ける力と導線の中を走る電子が受ける力(導線が受ける力)とは、それぞれが共に構造体に伝達されるが、導線を設置せずに放電と言う方法を用いた場合、空間を飛ぶ電子が受ける力の方は構造体には伝達されない。

以上を要約する。

10

「 $\vec{I} \times \vec{B} = \vec{0}$ とならないような位置関係で磁石と一対の電極とを固定した構造体について

考える。その構造体の磁界の中に於いて電極間で放電を起こすと、力の伝達に係る対称性が崩れ、構造体には零でない力が伝達される。」

この力により、構造体は加速度運動を行なう。

これが、UFOの飛行原理である。

そして、この構造体が、UFOの飛行原理に基づくUFO飛行装置である。

4. UFOの作成

飛行させたい物体に(形状は問わない。)UFO飛行装置取り付ければ、UFOの基本的な部分は完成である。

20

因みに、UFO本体の構造、電力供給の問題、飛行制御の方法等、工学上のテーマについては、稿を改めて考察すべき事柄である。

さて、UFO全体の質量をMとする。

電極VとUとの間で放電を起こせば、UFOには力 $-\vec{F}$ が作用するから、

$$-\vec{F} = M\vec{a}$$

$$\vec{a} = -\frac{\vec{F}}{M}$$

30

ここに、 $\vec{F} = l\vec{I} \times \vec{B}$

\vec{a} : UFOの加速度。

\vec{I} : 電極U・V間の放電の電流。

l : 電極VからUに至る放電の経路長。

磁石を電磁石とするならば、

40

$$|\vec{B}| = k|\vec{I}_m|$$

ここに、k : 比例定数。

\vec{I}_m : 電磁石に流れる電流。

$$B = |\vec{B}|, I = |\vec{I}|, I_m = |\vec{I}_m|, F = |\vec{F}|, a = |\vec{a}| \quad \text{と置く。}$$

$$\vec{I} \perp \vec{B} \text{ を満たすように飛行装置を作れば、} F = |\vec{F}| = lIB$$

10

$$\text{また、} I_m = I \text{ を満たすように飛行装置を作れば、} a = |\vec{a}| = \left| -\frac{\vec{F}}{M} \right| = \frac{kII^2}{M}$$

$a \geq 2g$ と置くと、

$$I \geq \sqrt{\frac{2Mg}{kl}}$$

20

この時、UFOは、地球の重力に打ち勝って、 g 以上の加速度で上昇する事が出来る。
尚、この飛行装置は、水密性を確保しておけば、海中・水中でも使用可能である。

5. おわりに

地球と月の間の距離は約380000kmである。

地球から月までを、ここで提案したUFOで行くものとする。中間地点までは g で加速し、それ以降は g で減速し、月には速度0で着陸するものとする。

中間地点までに要する時間 t は、

$$\frac{1}{2}gt^2 = \frac{380000 \times 10^3}{2}$$

30

$$t = 6.23 \times 10^3 \text{ 秒} = 1.73 \text{ 時間}$$

よって、往復に要する時間は、約7時間であり、月旅行は日帰りが可能となる。

尚、加減速が g であるから、身体的負担はないものと思われる。

(引用終わり)

【0007】

以下に、引用論文の一部を再掲する。

「 $\vec{I} \times \vec{B} = \vec{0}$ とならないような位置関係で磁石と一対の電極とを固定した構造体につい

40

て考える。その構造体の磁界の中に於いて電極間で放電を起こすと、力の伝達に係る対称性が崩れ、構造体には零でない力が伝達される。」

この力により、構造体は加速度運動を行なう。

これが、UFOの飛行原理である。

そして、この構造体が、UFOの飛行原理に基づくUFO飛行装置である。

【0008】

引用論文に記述されているように、 $\vec{I} \times \vec{B} = \vec{0}$ とならないような位置関係で磁石と一対

の電極とが固定された構造体(構造体の役割は、磁石と電極との相対的な位置関係を固定する事であるから、形状は問わない。また、構造体は磁石や電極に対して電磁氣的な影響

50

を与える事がないように配慮されているものとする。) であって、これらの電極間で放電を起こす事が出来るように作成された構造体は、U F O の飛行原理に基づく U F O 飛行装置である。

ここに、 \vec{I} は放電の電流、 \vec{B} は固定された磁石の磁界である。

【 0 0 0 9 】

U F O 飛行装置を、飛行させようとする飛行体に取り付ける事により課題が解決する。何故なら、この飛行体は適当な大きさの電流を供給すれば、地球の重力に打ち勝って加速度運動をする事が出来るからである。

本発明は、以上の構成よりなる U F O 飛行装置である。

10

【 発明の効果 】

【 0 0 1 0 】

本発明による U F O 飛行装置を、円盤に取り付ければ、所謂 U F O が実現する。

【 0 0 1 1 】

この U F O は、引用論文にあるように、適当な大きさの電流を供給すれば、地球の重力に打ち勝って g 以上の加速度で上昇する事が出来る。加減速の加速度を身体的に負担がないと考えられる g としても、日帰りの月旅行が可能となる。

【 0 0 1 2 】

U F O の実現により、飛行機の失速による墜落と言う悲劇は避ける事が出来るようになる。

20

【 0 0 1 3 】

気象観測衛星等の人工衛星は、ロケットで打ち上げるのではなく、宇宙空間の必要な場所に U F O で置きに行く事となる。

【 0 0 1 4 】

自動車用の車体に U F O 飛行装置を取り付ければ、空飛ぶ自動車が実現する。この通路としては、従来のような道路ではなく空間に通行帯を設定するだけでよく、その容量は幾らでも大きく設定する事が出来るから、交通渋滞は発生しない。

又、超高速移動 (g で加減速すれば 1 0 0 0 k m 離れた地点に約 5 分で行く事が出来る。) が可能となるから、大都市への過度の集中の必然性はなくなる。

【 図面の簡単な説明 】

30

【 0 0 1 5 】

【 図 1 】 棒状の磁石を用いた場合の本発明の一例としての斜視図である。

【 図 2 】 棒状の磁石を用いた場合の本発明の一例としての平面図である。

【 図 3 】 棒状の磁石を用いた場合の本発明の一例としての正面図である。

【 図 4 】 棒状の磁石を用いた場合の本発明の一例としての側面図である。

尚、磁石の形状は問わないから、磁石は必ずしも棒状である必要はない。

【 発明を実施するための形態 】

【 0 0 1 6 】

以下、本発明を実施するための形態について説明する。

40

① $\vec{I} \times \vec{B} = \vec{0}$ とならないような位置関係で、磁石と一对の電極とを構造体に (構造体

の役割は、磁石と電極との相対的な位置関係を固定する事であるから、形状は問わない。また、構造体は磁石や電極に対して電磁気的な影響を与える事がないように配慮されているものとする。) 固定する。

ここに、 \vec{I} は放電の電流、 \vec{B} は構造体に固定された磁石による磁界である。

2 構造体に固定された電極は、電極間で放電を起こす事が出来るように電源に接続する。電極間での放電は構造体に固定された磁石による磁界の中で起こるから、この構造

50

体は UFO の飛行原理を満足する。

従って、この構造体は、UFO 飛行装置である。

3 別の表現をすると、「UFO の飛行原理に基づく UFO 飛行装置を作成するには、磁

石と一对の電極とを、(i) $\vec{I} \times \vec{B} = \vec{0}$ とならないような位置関係に於いて固定した、

(ii) 電極間で放電を起こす事が出来る、構造体を作成すればよい。」と言う事である。

4 尚、放電現象が生じる電極間が真空であるか否かは、UFO の飛行原理にとっては本質的な問題ではない。

本発明は、以上の構成からなる UFO の飛行原理に基づく UFO 飛行装置である。

【符号の説明】

【0017】

- 1 構造体に固定されている磁石。
磁石の形状は問わないので、磁石は必ずしも棒状である必要はない。
- 2 磁石を固定する構造体上の点。磁石に働く力はこの点を介して構造体に伝わる。
棒状の磁石の場合は、この点の位置で例えば磁石の N 極を固定する。
- 3 磁石を固定する構造体上の点。磁石に働く力はこの点を介して構造体に伝わる。
棒状の磁石の場合は、この点の位置で例えば磁石の S 極を固定する。

尚、磁石と電極とは、 $\vec{I} \times \vec{B} = \vec{0}$ とならないような位置関係をもって、それぞれ

れが固定されておればよく、しかも磁石の形状は問わないから、磁石の N 極・S 極は構造体上の点 2・点 3 の位置に必ずしも存在する必要はない。

- 4 構造体に固定されている電極。
- 5 構造体に固定されている電極。
- 6 構造体。

ここでは、構造体を便宜上蓋と底の無い六面体（六面体状）として表現しているが、構造体の役割は磁石と電極との相対的な位置関係を固定する事であるから、その形状は問わない。従って、構造体は六面体状である必要はない。

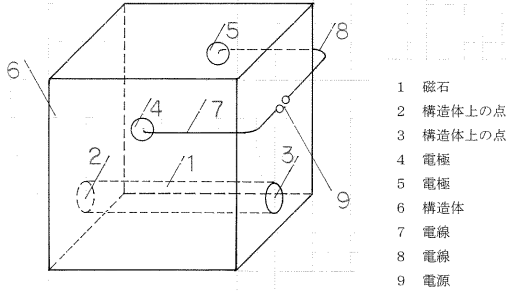
- 7 電源と構造体に固定されている電極とを繋ぐ電線。
- 8 電源と構造体に固定されている電極とを繋ぐ電線。
- 9 電極間に於いて放電を起こさせる事が出来る能力を有する電源。

10

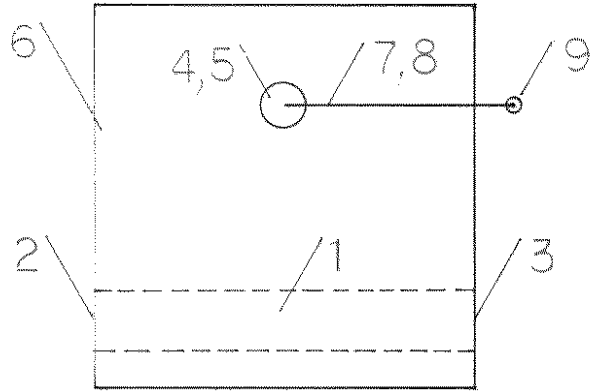
20

30

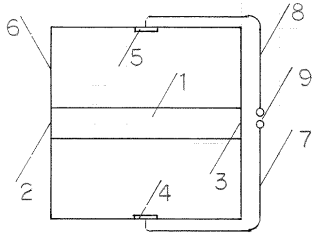
【 図 1 】



【 図 3 】



【 図 2 】



【 図 4 】

